20xx年、ここは一人の医者が経営する精神病院

繁盛のしていないその病院は酒と煙草とドラッグを患者に進める

医者によってバーとして経営されているのであった。

―　チャプター１　心療内科とリボルバー　―

「今日も酒がまずいな」

その奇怪な格好をした医者は酒を片手にリボルバーを回している

彼女がここの院長兼オーナーであるジェシカ・フランディだ

彼女はグラスに入った酒を飲み干すとおもむろに引き金に指をかけ

ダァン！ダァン！ダァン！

と三発の銃弾を自分のこめかみに向けて放った。

乾いた音が響き、医者はうなだれたかと思うとムクリと起き上がり

ケラケラと笑い出す。そうここはジェシーの精神病院、治療方針は現実逃避。

彼女が笑いながら酒を飲んでいるとバーの扉が開かれた。

カランカラン

とっさに目線とリボルバーを扉に向けるとそこには

小綺麗な衣服を身にまとった、白百合のような女が来店してくる。

いつもは中毒者(ドランカー)か強盗か頭をやられたパンピーばかり入ってくるもの

だからと、とっさに銃を向けたがジェシーは珍しいこともあるといった顔で

銃口を下げる。それと同時に銃を向けられても一切動じない彼女も又、頭のおかしいパンピーの一人なのだろうと理解する。

「あら、間違えたかしら。そこのあなた、ここは病院じゃないのかしら。院長はどちらに？」

「半分はあっているよ、病院兼バーだからな」

「でしたら、もう半分も教えてくださる？」

「私が院長だよ、マスターとよびなー」

白百合の女がキョトンとした顔でジェシカを見つめる。それもそうだ、酔っ払いの言う事など対してあてにはならない。ジェシカは回らない頭でいかにして追い払おうかと考えていると彼女が言う

「お隣よろしくて？私にも一杯くださらない？」

回らない頭で考える、飲み仲間ができた！うれしい！

ジェシカは棚の奥から秘蔵の酒を持ってくると１人分のグラスを出し彼女に差し出して酒をつぐ。秘蔵の酒を出した理由は汚いおっさんといかれた患者ばかり来るこのバーに同年代のきれいな女の子が来ることはジェシカにとって特別だったからだ。

「なかなかノリがいいなお前！名前は？」

「ハクアイ・シロとです」

「いい名前だじゃぱにーずか！ハク、私はジェシカ、ジェシーとよびなー」

「ではジェシー、乾杯」

「お、乾杯」

ジェシカは久ぶりの人との乾杯に少し戸惑いつつグラスを重ねる

「あら美味しい」

「酒の味もわかるのか！私はわからん、あはは！」

グラスの氷が溶け始めた頃、彼女は語りだす

「本題に移ってもいいかしら」

「うーん、やだ。仕事したくない」

「あら残念、今度良いワインでも持ってこようと思ったのに」

「じゃあいいよ」

ジェシカがそう承諾すると彼女の柔和だった表情が少しかたくなり語りだす。

「私は恋が分からないの」

「好意を向けられても無碍にしてしまう」

「あら」

「きっと頭の病気なのだわ」

「ふーん」

「ちょっと聞いてるの？」

「あー、そりゃあ感情消失疾患の初期症状だな」

「下手したらあと1ヶ月で廃人だぜ？」

そう言うとジェシカはリボルバーを取り出すとハクの額に銃口を向ける

それをされてなにも動じないハクアイに対してジェシカが言う

「こいつを使うのはちょっとリスクがあるー、まあ廃人になるよりマシだが」

「使う上で患者にはいちばん大事なものをかけてもらう必要がある」

「あんたは何をかける」

「愛をかけるわ」

ズドンと前置きもなく医者が銃を放つと白百合の女が意識を失うと同時に

医者の意識もなくなる

・・・・・・・・・・・戦闘パートへ移行・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・戦闘パート終了、ノベルパートへ・・・・・・・

―　チャプター２　ドランカーと美味しい可燃物　―

数分と立たないうちにジェシカの意識が目覚めるとおもむろに立ち上がり

酒を探し始めた。

・・・・・・・・・・チュートリアル・・・・・・・・・・・・・

戦闘が終了すると患者を起こすまでの間、バーを探索することができます。

酒や、タバコ、カルテ、と言ったものに触れると新しいカードやジェシカの

体調に良い効果をもたらすことができます。ですが飲み過ぎにはご注意を。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・おこす・・

「おらっ、おらっ」

ジェシーが意識のない女の後頭部を容赦なくどつくと女は目を覚ます。

「あら、、わたし寝ていたのかしら」

「こいつに慣れていないと寝ちゃうんだよな」

「あえて質問しなかったのですがそれは一体？ただの銃ではなさそうですけれど」

「あー、こいつは、あれだよ、あれ」

「あのー」

「、、、」

「まあいっか」

「よくないわ！」

「よくわからないもので治療？される身にもなってください！」

「はいはい、これはねー私が作った精神医療器具てきなあれ」

「これであんたの脳にアクセスしてなんやかんやすることによって、治療してる」

ジェシカは適当であった。なぜならこの銃自体はジェシカが最高にハイな状態のときに

ノリと勢いで作った代物であり、そのことをジェシカはほとんどおぼえていないのだ。

唯一覚えていることはこれが「リボルブ」という名前だということと、とっても便利だということのみである。

「まあ、治ってきてるしよくね？」

そう言いながらジェシカは女の頭を小突く

「ほんとに治っているのかしら？」

「あーーー、うぇあ、ああ、そうそう」

「経過観察する必要があって、いくつか、適当な質問してもらう必要があるんだけど」

「あとなんだっけ、質問してもらう必要があるんだけど」

「それとー、あとなんだっけああ、しつもんだ」

「ちょっと？大丈夫なの」

「あー、のみすぎた、なんだっけ？質問だ！」

「もういいわ、質問すればいいのね？」

「そうそう、しつもん！」

「では愛とは何だと思いますか？」

「あいー？」

・・・選択肢・・・

１，エゴ

２，脳のバグ

３，人間のうつくしさ

１

「エゴだね」

「性欲を正当化するために言っている人間のエゴさ」

「エゴ、たしかにそうかも知れませんわね」

「合理的な答えですけれど、ロマンがないわね」

「人間なんてエゴの塊さ、だから動物になろう！」

「確かに今のあなたは動物に近いかもしれませんわね、、、」

２

「脳のバグさ」

「本能でマッチングした相手のことを勝手に好きになるように出来てるのさ」

「バグですか、精神科医としてはまともなことを仰るのね」

「そうさ、てんさいだからー。てんさいだから」

「その理屈で行くとあなたは愛の使徒ですわね、、、」

３

「人間の美しさだよ」

「愛を持っているのは人間だけだよ。愛と名付けたのが人間だからね」

「ずいぶんロマンチストな表現ですわね」

「ロマンが無いと人は死ぬ！ロマネ・コンティもってこい！」

「今度、持ってきますわ」

「まじー！すげー！！」

・・・分岐終了・・・

「あい、質問おわり！」

「まだ応急処置だけど明日あさってに死ぬことはないんじゃない？」

「ハク、またあしたもきな！」

ジェシーが笑顔で手を振るとハクも又小さく手を振りバーを後にする

１日後

カランカラン

やはり病院には似つかわしくないその音が聞こえるとジェシカは扉に目を向ける

するとそこには白百合の女が立っていた。

「ジェシカー、来ましたわよ」

「だれだっけ？」

「はあ、まさか私のこと覚えてないんですか？」

「あー、まって、えーと、B-3地区の女だっけ？だから別かれるっていったじゃん」

「はあ」

「あ、ちがう？ちょいまって」

そう言いながらジェシカは自身のこめかみに銃を放つ

「あー、思い出した、昨日きたハクか」

「あなたのほうが先に診察を受けたほうがいい気がしてきましたわ」

「あはは、そうかもねー。まあとりま座りな」

そう言うとジェシカはグラスをハクアイにわたすと酒を適当な酒を取り出そうとする。

するとハクアイが言う。

「せっかくですから私が持ってきたワインでもいかが？」

ジェシカは完全に忘れていたがそれを思い出すとにんまりとした顔で

ハクアイから酒を受け取る

「じゃ、かんぱい」

「乾杯」

少しのんだところでハクアイが切り出す。

「それで、今日の治療はいつなさるの？」

「えー、まだいいじゃん」

その言葉を聞いたハクアイは昨日のジェシカの言動から、ギリギリまで時間を引き伸ばされることを感じ取った。それでいてハクアイは口がうまかった。

「仕事終わりのお酒のほうが美味しいのではなくて？」

「、、、」

医者は少し考えると銃を取り出し、ノールックで白百合の女の頭を撃ち抜く